

満州と綺堂読物

―岡本綺堂の日露戦争従軍経験をもとにして

原 辰 吉

はじめに

岡本綺堂は、明治四十四年の「修禪寺物語」（明治座）によって名声を得て、大正二年に専業作家となる以前、新聞記者として生活した。明治二十三年に父の伝手で東京日日新聞に見習い記者として入社後、いくつかの新聞社を転々としながら、塚原洪柿園や条野採菊らに教えを受け、作家としての素養を高めていった。

綺堂は明治三十六年五月に東京日日新聞社に再入社した。その翌年の二月に日露戦争が開戦し、綺堂は従軍記者として戦地に赴くこととなる。

日露戦争に従軍した作家としては、森鷗外がいる。戦後、赴任中に詠んだ詩歌を『うた日記』（明治四十年九月、春陽堂）として刊行している。また、同じく軍人としては瀕死の重傷を負った桜井忠温が帰還後、『肉弾』（明治三十九年九月、英文新誌社）を書き、各国で翻訳された。副題に「旅順実戦記」とあるように、自らの実戦経験に

基づいて書かれたもので、戦場での兵士たちの姿を美談として描いている。もっとも、この二名は綺堂と異なり、職業軍人としての従軍である。

綺堂と似た境遇であったのが、田山花袋である。花袋は博文館の写真班として満州の地へ渡り、その戦争の様子を取材した。花袋はこのときの従軍記録を『第二軍従軍日記』（明治三十八年一月、博文館）として刊行している。その後、花袋は明治四十年に「蒲団」（『新小説』明治四十年九月号）を発表、明治四十年代の自然主義文学を牽引していくが、日露戦争での兵の姿を描いた「一兵卒」を明治四十一年一月に『早稲田文学』に発表している。「一兵卒」では脚気を患った兵士が苦しみ死んでいく様子を描写し、大きな戦況のなかでクローズアップされない一人の死の哀れさを浮かび上がらせている。また、代表作の一つ「田舎教師」では、主人公の清三が遼陽攻略祝福の空気のなかひっそりと死んでいくが、その際に満州の平原に倒れた「同胞」のことを思っている。「一兵卒」では戦場の内部、「田舎教師」ではその外部から日露戦争を描いているといえるだろう。

この他、従軍経験はないが、夏目漱石は初期の短編「趣味の遺伝」（『帝國文学』明治三十九年一月）において、戦場の様子の空想や、帰還した將軍の風貌を記述している。また、漱石はのちに満州の地を訪ね、「満韓ところどころ」（明治四十二年十月二十一日から十二月三十日まで連載）として、その様子をまとめている。

このように日露戦争を描いた文学作品があるなかで、従軍した綺堂もまた戦地である満州を舞台として作品を手がけている。それは作家自身の従軍経験に基づくものであるが、そこにあらわれている心情は先に挙げた他作家とは異なるものであったといえよう。

本論は、読物のなかで満州とそれに伴う人物の心情がどのように描かれ、また、その心情がどのような要因で書かれたものであるかを考察するものである。

第一節で綺堂の従軍記をもとに従軍記者としての綺堂の足跡を辿り、第二節で満州を舞台とする「窯変」「雪女」といった作品を組上にあげ、従軍の実際と照合し、第三節において作品内の心情描写にうかがえる特徴の要因を従軍記や随筆から確かめる。「窯変」を収録する『青蛙堂鬼談』に関しては「綺堂の怪談は関東大震災以降の都市大衆社会時代のはらむ不安定性」を「従来の怪談を十分に咀嚼した手法によって表現した」という関東大震災と結びつけた清水潤氏の言及はあるが、従軍時の経験から両作品を照射したものではない。初期段階にある綺堂研究においても、新たな視座となるであろう。

一、綺堂の従軍記録

本節では綺堂の従軍経験の実際を追っていき、綺堂にとってどのようなものであったかを検討する。

綺堂の「遺稿 岡本綺堂年譜」(「舞台」岡本綺堂追悼号、昭和十四年五月)の明治三十七年(綺堂三十三歳)には以下のような記述がある。

二月、日露開戦。新聞社より従軍記者たるべく命ぜられ、陸軍省に従軍願を提出して、出征第二軍配属と定められる。

第一軍配属記者等は三月を以て出発の許可を得たれど、第二軍配属記者は容易に出発を許されず。七月に至りて初めて出発の命令を受け、十七日を以て東京を出発し、その途中、社用にて京都と大阪に滞在、更に広島にて出船を待つこと四日、廿四日を以て宇品を出帆す。御用船は月尾丸なり。玄界灘の浪高く、折々に濃霧に襲はる。

新聞社より命じられ、「第二軍」の配属となったことにより、開戦時から戦地に赴くまで数か月の時間があつたことがうかがわれる。なお、綺堂の随筆集『思ひ出草』（昭和十二年十月、相模書房）に収録された「昔の従軍記者」（初出不明。昭和十二年八月十三日とある）によれば、日清戦争時は「一定の規律」のなかった派遣記者も、日露戦争時には待遇等の規律が設けられたという。記者は「大尉相当の待遇」を受け、そのかわりに「軍隊の規律に一切服従すべし」、また「従軍記者は一社一人に限る」という決まりである。

とはいえ、大編成を組み、各所で作戦にあたる軍隊を一人の記者で全てを追えるはずもなく、困った新聞社は、自社の届け出の他に、地方新聞や小会社の名義を借り、自社の記者を送り込むという策を講じ、それにより、綺堂は「東京通信社」名義で許可を得たという。^(四)

これは戦地においては暗黙の了解で、軍の方でもこうした方法を厳しく取り締まることがなかったらしく、到着後には記者は本社の名義を名乗っていたという。ただし、「袖印だけは届け出での社名を用ゐることになってゐて、私もカーキ服の左の腕に東京通信社と赤く縫つた帛を巻いてゐました」（昔の従軍記者）と綺堂は書いている。

従軍前に撮影された若き日の綺堂の記念写真が残っているが、その腕章に着目すれば、「東京通」の文字がみえ、「東京日日新聞」ではなかったことが確認できる。^(五)

(画像①)



画像① 勝央美術文学館所蔵

戦地に渡った綺堂の動向は、「東京日日新聞」に明治三十七年八月から十一月にかけて掲載された綺堂の従軍記に詳しい。左はその一覧表である（なお、不鮮明で識別が難しい文字は「・・・」で示した）。

⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	No.
27日	19日	(不明)	17日	16日	9日	8日	7日	8月1日	発信日
某城			大石橋	・ ・ ・	大石橋	楊家屯	蓋平	金州	発信地
17日	7日	(不明)	9月1日	29日	30日	22日	22日	8月14日	掲載日
遼陽攻撃従軍記（第九信）	第二軍従軍記（第八信）	第二軍従軍記（第七信）	第二軍従軍記（第六信）	第二軍従軍記（第五信）	第二軍従軍記（第四信）	第二軍従軍記（第三信）	第二軍従軍記（第二信）	第二軍従軍記（第一信）	題
・高梁の家 ・初度の砲声 ・頑強なる捕虜 ・月前の進軍 ・七日余の記	・満州の水 ・満州の蛙 ・不價品	・大石橋の格闘戦 ・身を以て大隊長を救ふ ・全身の軍歌	・大雨中の夜襲 ・両日間の激戦 ・彼我の陣地	・金州の義人 ・占領後の東清鉄道 ・夏の満州	・戦後の南山	・小題			

⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	㉑	㉒	㉓
26 日	25 日	23 日	14 日	11 日	9 日	8 日	9 月 3 日	29 日
遼 陽	遼 陽	戦 地	戦 地		南 八 里 庄	・ ・ ・	南 八 里 庄	左 翼 軍
10 日	9 日	4 日	10 月 1 日	25 日	22 日	24 日	20 日	17 日
奥軍従軍記（第十八信）	奥軍従軍記（第十七信）	奥軍従軍記（第十六信）	奥軍従軍記（第十五信）	遼陽攻撃従軍記（第十四信）	遼陽攻撃従軍記（第十三信）	遼陽攻撃従軍記（第十二信）	遼陽攻撃従軍記（第十一信）	遼陽攻撃従軍記（第十信）
・藤原少尉の戦死 ・新立屯高地の突撃 ・市川工学士の名誉 ・陣中の名月	・前面の敵状 ・遼陽城 ・機関砲 ・黒鳩大将の退却	・角面堡 ・遼陽戦紀補遺	・左翼軍丙大部隊の行動 ・乙部隊の活動	・左翼軍の左翼部隊 ・砲台中の紅粉 ・復讐の大砲	・其の第五日 ・其の第四日 ・其の第三日 ・激戦の第二日	・其の第二日 ・戦闘の第一日 ・遼陽攻撃の開始	・湯崗子の温泉 ・敵の死傷と捕虜 ・八卦溝附近の追撃 ・二日間の戦闘	・鞍山店攻撃

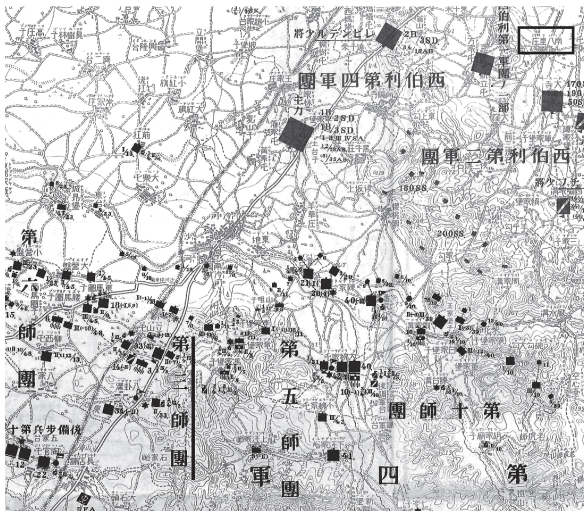
24	23	22	21	20	19
23日	23日	22日	10月21日	28日	27日
				戦地	遼陽
8日	7日		11月2日	15日	12日
奥軍従軍記（第廿三信）	奥軍従軍記（第廿三信）	奥軍従軍記（第廿二信）	奥軍従軍記（第廿一信）	奥軍従軍記（第廿信）	奥軍従軍記（第十九信）
・捕虜と戦利品	・其の第六日	・其の第三日	・沙河の大会戦	・沙河の大会戦	・首山堡の戦死者橘少佐
・勅語の不思議	・其の第五日	・戦闘第一日	・敵兵の南下	・遼陽の悲劇	
・戦記補遺	・其の第四日	・其の第二日			
・薬人形的計略	・其の第六日				
	・其の第七日				
	・其の第八日				

綺堂の発信した従軍記は、二週間以上を経て本社に到着している。はじめ「第二軍従軍記」と題されていたが、遼陽の大規模な戦闘に際しては「遼陽攻撃従軍記」、その後、沙河会戦までは陸軍第二軍の司令官奥保鞏の名から「奥軍従軍記」となっている（これらの総称を以降「従軍記」と表記する）。なお、この第二軍には軍医として森鷗外、写真班として従軍した田山花袋がいた。花袋は鷗外のもとを訪ね度々文学談義を交わしたというが（田山花袋『第二軍従征日記』明治三八年一月、博文館）、綺堂の記述には両者の名は登場せず、彼らの交流はなかったものとみられる。

綺堂は第二軍の動きに従い、金州から、蓋平、大石橋、海城と南満州鉄道を北上していったことが「従軍記」からうかがえる。八月十九日発信の「第二軍従軍記」では、塚原洪柿園の「三十日餘の記」になぞらえ「七日餘の記」として八月十日から十八日までの出来事を日記形式で記述している。十九日の日記には「午前は司令部へ赴きて原稿検閲を請ひ、午後は軍医部に行く」とあり、新聞社へ送る「従軍記」は司令部の検閲を受けていたことがわかる。

この「七日餘の記」はのちに「海城のやどり（満州従軍日記の一節）」（『五色筆』大正六年十二月、南人社）として収録されており、その際に検閲のため伏せられていた箇所が明らかになっている。たとえば、「七日餘の記」において、「某処」とされていたのは「海城」で、綺堂が配属となった「某師団」は「第三師団」である。「七日餘の記」において綺堂は城門の表記が漢字ではなくカナで「ダイ○シダンシレイブ」と示されているのは「露探」（この場合はロシア側の清国人）に所在地を明かさないたためではないか、という推測を行っているが、これは「ダイシシダンシレイブ」である。

綺堂は「遼陽攻撃従軍記（第十信）」において、「八卦溝附近の追撃」として望遠鏡で覗き見た戦闘の様子を記しているが、「参謀本部」の地図をみると、第三師団の存



図② 「従軍記」第十一信の発信地である「南八里庄」が北東に確認できる。

在をそこに確認することが出来る。このことから綺堂は第三師団附であったとみてよいだろう。(図②「第四及び第二軍諸隊之位置」《明治三十八年日露戦史 第三卷附图》参謀本部編纂《参照》)

この「従軍記」は十月二十三日発信の沙河会戦を記した「奥軍従軍記(第二十三信)」で終わっている。遼陽会戦、沙河会戦と二つの大規模な戦闘を目撃した綺堂であるが、「十一月に入りて東京の本社より社長更迭の通知を受く。(略)随つて社内も動揺を免かれず、岡本も俄に帰国することとなりて、十一月四日に沙河を出発(以下略)」(「綺堂年表」というように社内事情により、従軍を終え帰国していることが見てとれる。

「従軍記」における主要な題材は戦闘の記録である。綺堂もひとたび戦闘がはじまれば攻撃の様子を詳しく記し、「剣と剣とは相触れたり銃と銃とは相撃ちたり肉は飛び血は漂へり斯の瞬間は実に怖ろしかりき」と戦場の現実を、実感をもって書き記している。

「従軍記」によれば、戦闘に参加していない記者たちもけつして安全ではなかったようである。沙河会戦の「其の第三日」(「奥軍従軍記(第廿二信)」では「(略)司令部の門を潜るや某旅団の副官居合わせて『君達はまだ知らぬか、信濃日報が殺られたぞ』と云ふ」とあり、信濃日報の川島順吉が砲弾を受け、死亡したことが記述されている。綺堂は還暦祝いの句集『独吟』(昭和七年十月)のなかで「先月の中秋の夜、わたしが『戦場誰識幾人還』の句を示すと、川嶋君は『君も感傷的になつたね』などと笑つてゐたが、その一句が遂に讖をなしたやうに思はれて、私としてはいよく凄愴の感を深うした」と回想し、そのとき詠んだ「野塘風雨暗楊。大戦將酣君已亡。破廟蕭條香火裏。旅魂今夜謁龍王」の詩を収録している。この川島順吉については「昔の従軍記者」のなかでも触れ、「私もその時、小銃弾に帽子を撃ち落とされましたが、幸ひに無事でした」と従軍が危険と隣り合わせであったことを述べている。

このように綺堂は軍とともに北上し、遼陽、沙河の会戦を目撃、その戦場の恐怖と危険とを身をもって体験している。一方で綺堂の関心は必ずしも戦場にしか向いていなかったわけではない。戦地へ赴いた綺堂の第一報となる「第二軍従軍記（第一信）」には、従軍記者としての自らの態度を示した次の一文がある。

予は斯の第一信を草するに方りて予じめ読者に告げ参らする事あり、其は別儀にあらず、予の通信は努めて平易通俗を旨とすることはなり。

（略）又た難ずべきに非ずと雖も日露の大戦は天下の遍く目を注ぐ所にして戦報一たび至れば児童走卒も亦其の一行一句を玩味して其の詳を極め其の細を知らんとするは蓋し自然の人情なり。然ればこの際に於ける通信記事は成べく通俗を旨として何人と雖も容易に其意を解し得らる、様に筆を執らんこそ従軍記者の職務なれ。予は斯く信ずるを以て今後の通信は努めて險怪の文字を避けて成べく平易の筆を執らんとす（略）

この「通俗を旨」とする心構えは、題材の選択にもあらわれている。一般に従軍記録の主ともいえる戦闘の概略の他に、満州の地における風物や伝聞が綺堂の「従軍記」には記されている。たとえば、「第二軍従軍記（第二信）」では、「金州の義人」と題して「一種小説的実話を耳にした」ことを記事にしている。「清人」に姿をやつした日本人が宿場にて日本を慕う主人に出会うという話である。綺堂はこれを知り、実際にその宿場を訪ねている（ただし、主人は不在であった）。また、遼陽攻略後には「陣中の名月」（奥軍従軍記（第十七信））と満州の月について記述しており、危険な戦地において詩情のある文章が書かれるという落差がそこには存在している。もともと、これには作戦に関する情報の規制が背景にはあり、戦場の様子を記事にできなかったという事情もあるうが、その題材

選ぴからは綺堂が満州の地そのものへの関心があつたことが察せられる。そこで見聞きしたことが、後の作品に影響を与えているといえるだろう。次節からは、綺堂の作品と経験とを照合させながら、従軍の経験を綺堂がどのように作品に仕立てていったかを考察する。

二、「黒変」と「雪女」における満州の描写

綺堂読物のなかで満州を舞台にしている作品が「黒変」と「雪女」である。両作品はどちらも、主人公のある日本人が宿りを求めて訪れた現地人の家で事件に遭遇するという点で共通している。この日本人像には少なからず綺堂自身が投影され、現地の様子は満州での経験に基づいていると考えられる。本節では、作品における満州の描写を綺堂の「従軍記」や随筆の記述と照らし合わせるとともに、その作品の構造を分析していく。

「黒変」は大正十四年九月の「苦楽」に掲載された怪奇短編小説である。綺堂は大正十四年の三月から「苦楽」に「青蛙堂鬼談」として怪奇譚を連載しており、のちにそれらを『青蛙堂鬼談』（大正十五年三月、春陽堂）としてまとめた。「苦楽」にはその前年に巷談集の『三浦老人昔話』（大正十四年五月、春陽堂）におさめられる短編を連載しており、『青蛙堂鬼談』はそれに続く「綺堂読物乃集」第二集に当たる。「苦楽」を発行するプラトン社は関西にあり、関東大震災による被害をうけておらず、このような書籍刊行が可能だった。なお、『綺堂日記』（平成元年九月、青蛙房）に拠れば六月十一日に起稿、翌十二日には「それから原稿をかき、三時ころまでに脱稿、過日來の分をあわせて二十八枚、題は『黒変』といふ」とあり、本作は二日間で書かれた作品であると推定できる。

「黒変」は「第七の男」（「青蛙堂鬼談」はそれぞれの篇において異なる語り手が怪談を語るという百物語の形式をとっている）の語りが物語のはじめに据えられている。

明治三十七年八月二十九日の夕方である。僕はその当時、日露戦争の従軍記者として満州の戦地にあつて、この日は、午後三時ごろに楊家店といふ小さい村に行き着いた。前方は遼陽攻撃戦の最中で、首山堡の高地はまだ陥らない。砲銃の音は絶え間なしにひびいてゐる。

語り手の「第七の男」がかつて日露戦争の従軍記者であり、戦時中の満州が舞台となつてゐることが冒頭で示されている。

「僕」（＝第七の男）をふくめた従軍記者四人の一组が「今夜のやどり」を訪ね、井戸の近くにいた若い満州人の反対を押し切り、一軒の民家に休息を求めるところから、物語がはじまる。反対する満州人がいうにはそこは「家有妖」、つまりは化物屋敷だという。

家の奉公人は彼らを歓迎した。それは家に病気の娘があり、日本人が携えている薬を欲しがっているからであつた。美しい娘はあきらかに肺病に侵されていて、彼らは解熱剤を処方する他になかつた。

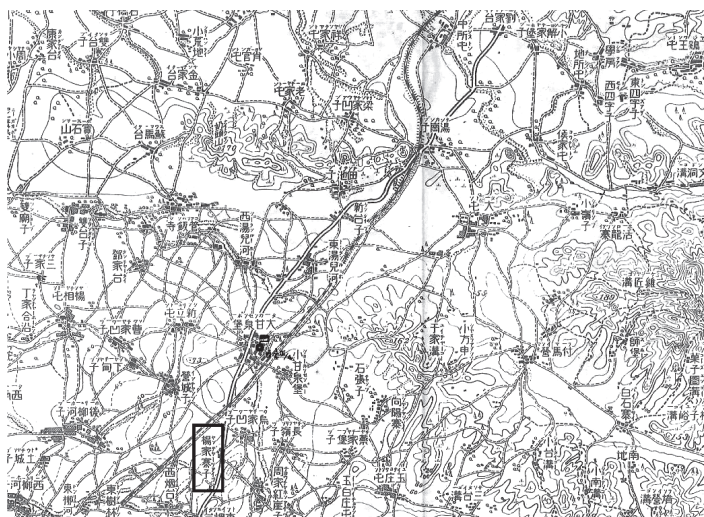
その後、彼らが火にあたっていると、軍隊付きの通訳者S君がやってくる。S君は先ほどの「家有妖」と忠告を与えた満州人の祖父から、その家の由来を聞いたという。その家は姓を徐といい、四十年前は瓦屋を営んでいた。ある日、捕吏に追われた旅人二人が駆け込んできた。二人は匿ってくれたら、金の半分を与えろという。家の主人と息子は二人を竈に隠すが、巡警の捜索がやってきたため、火をかけてごまかす。巡警をやり過すことはできたが、そのまま竈の中に隠れた二人を焼き殺してしまったという。それ以来、徐の家では焼き物が人間の顔や手足の形に変わるといふ窯変が起き、また、家のものが次々と亡くなるという。

以上が「窯変」のおよそのあらすじである。

「窯変」の本文各所には、従軍に関する描写が細かく散りばめられている。綺堂自身が日露戦争の従軍記者であったことを考えれば、これらの描写はその経験に基づいていると仮定できよう。ここで、綺堂の年譜や「従軍記」、随筆と、「窯変」本文とを照らし合わせてみたい。

まず、先に引用した冒頭部だが、これに対応する記述が、綺堂の自筆年表中にみとれる。綺堂年譜には、「二十九日より遼陽攻撃戦はじまる。雨を冒して前進し、九月三日の午後、遼陽城外に到着す」とある。遼陽への攻撃に従軍した点で綺堂の経験と「窯変」の語りの内容が一致する。「遼陽攻撃従軍記（第九信）」には某城外（海城）を出て進軍、「早幾里を越えたりけん午前八時過る頃ひに楊家寨子に着く、誠に楊家の名に背かず数十株の緑楊は孤村を囲て緑絲々の間に四五十戸の農家あり此処にて一時休息す」とあり、「楊家店」と「楊家寨子」という違いはあるが、対応する村に実際に綺堂が滞在したことがわかる（楊家寨子の場所は図③を参照。出典は図②と同じ）。

また随筆「昔の従軍記者」と照合していけば、以下のように対応箇所をたどることができる。



図③

宿についての記述

〈窯変〉「僕達は三晩つゞいて野宿同様の苦を凌いで来たので、今夜は人家をたづねて休息することにして、二三人あるひは四五人づつ分れくになつて今夜のやどりを探してあるいた。」

〈昔の従軍記者〉「併し戦闘継続中は隊の方でもそんなに世話を焼いてゐられないので、私たちは勝手に宿所を探さなければなりません。空家へ這入つたり、古廟に泊つたり、時には野宿することもありました」

持ち物についての記述

〈窯変〉「僕の腰につけてゐる雑囊」「四人は肩にかけてゐる水筒」

〈昔の従軍記者〉「従軍記者の携帯品は、ピストルのほかに、雨具、雑囊又は背囊、飯盒、水筒、望遠鏡で、通信用具は雑囊か背囊に入れるだけですから、沢山に用意して行くことが出来ないので困りました」⁽¹⁾

食事についての記述

〈窯変〉「めいくゝの雑囊の中には食塩を用意してゐたので、それを唐もろこしに振りかけて食ふと、さすがは本場だけに、その旨い味は日本の唐もろこしのたぐひで無い」

〈昔の従軍記者〉「時には唐蜀黍を焼いて食つたり、時には生卵二個で一日の命を繋いだこともありました。」

「窯変」の描写のそれぞれは、綺堂の従軍記者としての経験に裏打ちされていることがはっきりとしてくる。「窯変」と「昔の従軍記者」では「窯変」の方が、発表年が先である。つまり、綺堂は「昔の従軍記者」で思い起こされる

ような事象を、先行して「窯変」という作品のなかに記述しているといえよう。

ただし、綺堂は「窯変」にあるような怪事は経験しなかったという。そのことは同じく「昔の従軍記者」に「鬼が出るという古廟に泊ると、その夜なかに寝像の悪い一人が関羽の木像を蹴倒して、みんなを驚かせましたが、ほかには怪しい事ありませんでした。鬼が出るなどと言ひ触らして、土地のごろつき共の賭場になつてゐたらしいのです」と記述されている。経験し得なかった怪異については「窯変」でより創作的に構成しているといえるだろう。

「窯変」は怪談としては、日本各地でみられる伝承の「異人殺し」の構造をとっているといえる。「異人殺し」はムラ等共同体の外部から来た人々（異人）を排除しようとする観念に支えられ成立した伝承であり、それは共同体のなかの特定の家に対する排除の観念と結びついていることを小松和彦は指摘している（「異人殺しのフォークロア」『現代思想』昭和五十九年、十一月～十二月）^(八)。

「窯変」もまたこの図式に当てはまるといえる。「窯変」におけるの共同体は「楊家店といふ小さい村」のことである。ある日そこにやってくる異人は「二人の旅人」であり、「楊家店といふ村」の「徐」によって排除される。

また、桂井和雄は「遍路や六部などの持ち金を盗んだ家筋の話」（『季刊民話』七号、昭和五十一年）^(九)において、こうした遍路や六部といった旅人殺しの世間話に以下の形式を見出している。

- 1 殺されるものがつねに多額の金銭を持つ遍歴中の遍路や六部であること。
- 2 その持ち金を盗み取った家筋が、それを元手にしてしにのし上がり、村や町の分限者、素封家になっていること。
- 3 殺された遍路や六部などのたたりが、持ち金を盗んだとされる家筋のものにあらわれること。

4 以上の中で2の条件の後半、3の条件のいずれかが欠如したものが、伝説として語られていること。

これらの条件もまた「竈変」に符合する。「1」は「重そうな革袋」を持つ旅人、「2」は「俄に工面好くなつた」「徐の家」である。「3」の「たたり」は竈変や家のものの死としてあらわれ、「4」の欠如は「2の条件の後半」である「分限者」や「素封家」になるといふ部分が⁽¹⁾当てはまる。

これらをふまえると綺堂の「竈変」も「異人殺し」の形式に沿った因縁話に仕立てあげられているといえよう。綺堂は古今東西の怪談からその素材をあつめていた。よつて「竈変」も典拠となる特定の記述があつてもおかしくはないが、現在のところ明らかではない。しかし、怪談の筋としては、このような従来の伝承の構造をとっているといえよう。これらのことから「竈変」は、従来の怪談の構造を利用した虚構を、綺堂自身の実体験をふまえた描写によつて支える形で、構築した作品であるといえる。

同じく満州を舞台とした小説に「雪女」がある。初出は大正十年一月の「面白倶楽部」である。原題は「吹雪の夜」で、のちに「綺堂読物集乃五」として春陽堂から大正三年八月に刊行された『今古探偵十話』に収められ「雪女」とされた。『今古探偵十話』は「読物集乃四」にあたる『探偵夜話』に続く探偵趣味傾向の強い奇談をまとめた読物集であるため、収録の際に文末に探偵談を匂わせる文句が付け足されているが、ほぼ初出と同内容である。千葉俊二氏が「前著『探偵夜話』に比べた場合、「探偵十話」と名乗りながらも、探偵的な要素よりも怪奇小説的なそれの含有量の方が多いといわざるを得ないようである」と⁽²⁾いうように、「雪女」もまた、事件の解決が用意されていない怪奇的要素の強い作品となっている。『今古探偵十話』に収録の「雪女」は「O君は語る」として以下の文からはじまる。

大正の初年から某商会の満州支店詰を勤めていた堀部君が足かけ十年振りで内地に帰って来て、彼が満州で遭遇した雪女の不思議な話を聞かせてくれた。

この出来事の舞台は奉天に近い芹菜堡子とかいふ所ださうである。わたしも曾て満州の土地を踏んだことがあるが、その芹菜堡子とかいふのはどんなところか知らない。併しそれが所謂雲朔に近い荒涼たる寒村であることは容易に想像される。堀部君は商会の用向きで、遼陽の支店を出発して、先づ撫順の炭鉱へ行つて、それから汽車で蘇家屯へ引返して、蘇家屯から更に渾河の方面にむかつた。蘇家屯から奉天までは真直に汽車で行かれるのであるが、堀部君は商売用の都合から渾河で汽車にわかれて、共に連れた支那人と二人で奉天街道をたどつて行つた。

この後、堀部の一行は雪に降られ、芹菜堡子に宿りすることになったのである。その家には主人夫婦とその娘、雇人二人が住んでいた。そこで堀部は「雪の姑娘」の話を聞く。「雪の姑娘」は清の太祖の侍妾であつた姜氏という美女が、妬みを受け不貞を云い触らされ、「大雪のふる夕、赤裸にして手足を縛られて、生きながらに渾河の流れに投げ込まれ」、それ以来、大雪の降る夜には白い女の姿が吹雪のなかにあらわれて「それに出逢ふものは命を亡う」というものである。そして、「そればかりでなく、その白い影は折々に人家へ忍び込んで来て、若い娘を招き去る」という。この家でも三年前に十三歳になる姉娘を誘ひ出されたということである。

堀部はこの話を「迷信」として信じようとしなかったが、その夜、堀部たちの目の前に白い影があらわれて、娘が連れさられてしまふ。

よく知られた小泉八雲の「雪女」（明治三十七年）等とは趣を異にする雪女譚として仕立てられている。

この物語は日露戦争後の大正年間の満州を舞台としているが、「窰変」と同じく随所に従軍時の記憶が散りばめられていると考えられる。

主人公の堀部ははじめ「こ、らにも馬賊はゐるだらう」と雪女の正体を馬賊のしわざだと疑う。この馬賊について綺堂は『独吟』のなかに「満州遼陽にて」と詞書し「銅鑼打つて馬賊ふせぐや村の秋」という句を残している。句と同様の光景を綺堂は目撃したのだろう。

また、堀部の従者について「雪女」では「供の支那人は堀部君の店に長く奉公して、気心のよく知れてゐる正直な青年であつた。彼は李多といふのが本名であるが、堀部君の店では日本式に李太郎と呼び慣はしてゐた」と書かれているが、「昔の従軍記者」では苦力に対して以下のように呼び表していたことが記述されている。

苦力の日給は五十銭でしたが、みな喜んで忠実に働いてくれました。一人は高秀庭、一人は丁禹良といふのですが、そんなむづかしい名を一々呼ぶのは面倒なので、私の考案で一人を十郎、他を五郎といふ事にしました。この二人が「新聞記者雇苦力、十郎、五郎」と大きく書いた白布を胸に縫ひ付けてゐるので、誰の眼にも着き易く、往來の兵士等が面白半分に「十郎、五郎」と呼ぶので、二人も一々その返事をするのに困つてゐるようでした。苦力の曾我兄弟はまつたく珍しかったかも知れません。

綺堂は苦力に日本式の名前をつけていたようだが、これは作中の堀部の姿と対応している。

冒頭にある堀部が辿った道のりは、従軍記者綺堂の実際の道程とは異なっているが、こういった描写の端々に従軍時の経験が生かされているといえよう。

「雪の姑娘」については似た話が随筆集『猫やなぎ』（昭和九年四月、岡倉書房）に収められた「満州の夏」（『都新聞』昭和六年七月）にある。遼陽の城外にある「東京陵」の話のなかに次のように書かれている。

傳へていふ、月夜雨夜にこゝを過ぎると、凄麗の宮女に逢ふことがある。宮女は笛を吹いてゐる。その笛にひかれて、宮女のあとを慕つて行くものは再び帰つて来ないといふ。支那の小説にでもありさうな怪談である。

「雪女」において「雪の姑娘」は「大雪のふる夜」にあらわれるという条件があるが、東京稜では「月夜雨夜」と条件付けられている。特定の夜にあらわれ、人を連れ去り、「再び帰つて来ない」という部分は「雪の姑娘」と重複する部分である。「雪の姑娘」の伝承が実際にあったのかどうかは不明だが、似た条件をもつ怪談話が存在していたのである。

ただ、この伝聞には後付けがあり、「宿屋の主人に聞き糺すと、その宮女は夜ばかりでなく、昼でも陰つた日には姿をあらわすことがあるといふ。ほんとうに再び帰つて来ないのかと念を押すと、さう云つて置く方が若い人たちの為であらうと、主人は意味ありげに笑つた」というオチがつけられている。

作中、堀部は何度となく、「雪の姑娘」を否定しようと努める。たとえば、堀部は「馬賊にも限るまいが、兎にかくに泥坊の仕業だよ。むかしからそんな伝説があるのを利用して、白い女に化けて来るんだよ」と、雪女の正体を盗賊のしわざであると予想する。また、堀部はこうした論を展開し、「天晴れ相手の蒙を啓いた積り」になるが、従者は納得しようとしなない。そのときの堀部の心情は「惻口なやうでも矢はり支那人である。今時こんな迷信に囚はれて、飽までも雪女の怪を信じてゐるのかと、情なくもあり、ばか／＼しくも感じられてならなかつた」と「支

那人」に対する侮蔑的な視点で述べられる。盗賊説を家の主人にも説くが、主人もまた承知しない。

しかし、物語の後半、いよいよ雪女があらわれるとそれが覆される。

雪煙かと思つて堀部君は眼を据ゑて屹と見つめてゐたが、それが煙かまほろしか、その正体を確かめることが出来なかつた。併し、それが人間ではないことは確かであるので馬賊の懸念は先づ消え失せて、堀部君もピストルを握つた拳がすこしく弛む（略）

このように、堀部の盗賊説は自身の目によつて否定されてしまう。物語は白い影の正体をあかさず、「若し堀部君に探偵趣味があり、時間の余裕があつたらば、進んでその秘密を探り究めるころが出来たかも知れなかつたが、不幸にして彼はそれだけの事実をわたしに報告してくれたに過ぎなかつた」という言葉で終わる。それは堀部が「迷信」の否定を成し得なかつたことを表しているといえよう。「蒙」とした「雪女の怪」が正となることで、堀部の合理的解釈が覆される構造となつてゐる。「東京稜」にあらわれる女の話では、最後にオチが付けられることによつて、それは怪談ではなくなるが、「雪女」においては最後まで正体不明の雪女をめぐる怪談話となつてゐるのである。「窠変」と同様に、綺堂は現地での経験を舞台装置として活用しながら、怪談話として仕立て上げてゐるといえるだろう。

ただし、満州での経験は単にそういった装置だけでは終わらなかつたようである。設定や背景描写だけでなく、人物描写にもその経験は生かされている。次節では、人物に焦点を絞り心情描写を抽出するとともに、その要因となつた綺堂の経験について探つていく。

三、描かれる同情心

「窰変」「雪女」の両編の怪談は、ただ不可思議な物語ではなく、ある種の悲愴を伴った作品となっている。「窰変」の末尾、語りは以下のように結ばれている。

われ／＼が遼陽の城外にゆき着いたのは、それから三日の後である。その後、僕は徐の家を訪問する機会がなかったが、彼の老人はどうしたか、病める娘はどうしたか。妖ある家は遂にほろびたか、あるいは依然として栄えてゐるか。今もとき／＼に思ひ出さずにはゐられない。

今ではもう知りやうがない徐の家の人々、そこに思いが巡らされている。徐の家は語り手にとつての気にかかる事柄の一つとなつてゐることが明かされている。この結末の語りは、語り手のところに残つてゐる事柄を提示することによつて、聞き手のところにも余韻を残す効果があるといえる。

先に指摘したように「窰変」「雪女」ともに、現地のある家に日本人が外部からやつて来るという点が共通しているが、さらにそこに不幸な老人や娘が登場し、やつてきた日本人はそれに同情心を寄せるといふ点においても両編は共通している。ただし、やつてきた日本人ははじめから同情心を抱くわけではない。そこにゐる人々を目の当たりにすることによつて、心情が変化するのである。

「窰変」において、語り手の「僕」をふくむ従軍記者の一行が出会ふのは病気の娘である。遼陽の戦いにより、城内に行き来できない娘に対し、「僕」の一行は「肺病」とわかつていながら、どうすることも出来ず、解熱剤を与える。以下、引用に附している傍線部は筆者による。

T君は雑囊から解熱剤の白い粉薬を出して、その用法を説明してあたへると、老人は地にひざまづいて押戴いた。それをみていて、僕はひどく気の毒になつた。満洲の土人は薬をめつたに飲んだことがないので、日本人にくらべると非常に薬の効目ききめがある。現に宝丹をのんで肺炎が癒つたなどという話も聴いた。しかしこの娘の病氣——殊にこの年頃でこの病氣——それが普通の解熱剤ぐらゐで救はれやうとは、とても想像の許さないところである。一時の氣やすめに過ぎない解熱剤の二日分や三日分を貰つて、素人医者の前にひざまづいて拝謝する老人——かれは恐らくこの家の忠僕であらう。——その姿を見るに堪へないやうな悼ましい心持になつて、僕はおもはず顔をそむけた。

ここで「僕」は薬が氣休めにしかならないことを知っている。しかし、薬をもらつた老人はそんなことはお構いなしに、「ひざまづいて拝謝」する。無知な老人の忠実で必死な様子が「僕」に「悼ましい」悲哀感を生じさせる。また、娘に対しても以下のように「僕」の一行の心情が描かれる。

「可哀さうだな。あの娘も長くは生きられないぜ。」

今までは、どんな娘だらうなどと一種の興味を以て待ち受けてゐたのであるが、さてその本人の悼ましい姿をみせられると僕達もう笑つてはゐられなくなつた。四人は顔をみあはせて一度に溜息をついた。(略)

ここでは「僕」の心情の変化が起きている。娘に対する好奇心は、「可哀さう」「笑つてはゐられない」という氣

持ちへと推移している。

一方の「雪女」においても、堀部が老人の話を「気の毒さうに聴いてゐる」描写があり、また「雪の姑娘」を恐れる老人を気遣い、李太郎に対し「おい、そのことをこゝの主人に話して、早く安心させて遣れよ。可哀さうに顔の色を変へて心配してゐるぢやないか」と命じている。そして、娘をさらわれた主人は「主人の老人は寢床から這ひ落ちたらしい妻をかゝへて、土間の上に泣き倒れてゐた」と悲嘆にくれる様子として描かれる。

「窯変」「雪女」とともに満州を舞台にした読物では、現地人に対し、哀しみと同情の念をもつて描写がなされているといえよう。

このように作中においては語り手の同情心が表出されるが、では、語り手にそう語らせる存在、読物の書き手である綺堂は、現地の人々をみて、どのような感情を抱くのであろう。

「奥軍従軍記（第二十信）」には「遼陽の悲劇」と題して現地の娘をめぐる悲話が書き記されている。綺堂はこの記事について「其の事実たるや頗る小説的で、或ひは筆者が多少の潤色を加へたかとの疑惑もあらうが、此れは紛れも無い事実、筆者は其の関係者から聞くがまゝ、を記述したので、決して架空の小説ではないと云ふことを予め断つて置く」と前置きしている。

「遼陽の悲劇」は、遼陽附近にすむ劉家の「蓮子」という娘のことが書かれている。蓮子は容姿佳麗、氣立てのよい娘であるが、父の看病のため、寄せられる見合い話を断っていた。しかし、ある日、無下にできない縁談が来たため、父母は蓮子に黙つてこの話を承諾してしまふ。そして、そのことを娘に打ち明けられないまま、ついに婚礼の日となった。ロシア軍は住民の立ち退きを禁じており、そこに日本軍の砲弾が降り注ぐ。蓮子は廟に逃げ込むが、砲弾によって命を失くしてしまふ。綺堂はこの話を以下のようにまとめる。

哀れは独り蓮子に止まらず、同時に夫に離れ娘に別れた母は、通信絶望の極、俄に発狂して走り出したのを、彼の叔父が漸く抑留めて、目下其宿に療養中だと云ふ。劉一家の悲惨、こゝに至つて何とも云ふべき詞を知らぬ。

これは単に其一例に過ぎぬので、他にも斯る惨事恨事が沢山あらう。嗚呼、露西亜帝国、汝の名は悪魔であるよ！ 予は終に臨んで重ねて云ふ。⁽¹¹⁾

「これは単に其一例に過ぎぬので」というように、記者である綺堂は「惨事恨事」の数々を他にも見聞きしたと考えられる。この話を直接のモチーフにしたかどうかは明らかでないが、このような「小説的」である不幸な娘やその家族の「事実」に出会い、のちに小説として、それを書き起こしていると考えられる。

また、「奥軍従軍記」(第十七信)の「陣中の名月」には以下のような独白がなされている。

九月寒砧催木葉、十年征戍憶遼陽。これは私が九つの時始めて唐詩選を読んで、遼陽といふ地名を諳んじた喟矢である。然るに今や遠征の軍に従つて、時恰も九月木葉を催すの節この遼陽に入ると云ふのは私に取つて一種の因縁あるかのやうに思はれる。であるから、戦勝といふ第一の目的の他に、私は何となく遼陽が恋しい、一日も早く行つて見たいと、宛がら不見恋に焦れた人の様に、出発当時から遼陽々と心竊かに急いでゐた。

このように、はじめ満州は綺堂にとって文学的な興味と結びつく憧れの土地でもあった。遼陽の地に焦がれていた綺堂であるが、到着後、「が、来て見れば他の奇無し、遼陽は矢はり遼陽、支那の市街は矢はり支那の市街」と「失望」している。

しかし、こうした中で、「今天中秋の佳節」が訪れる。綺堂等は宿舍の主人から「御馳走」を送られる。そして、「この家の主人夫婦、兄弟、五人の小児、四人の雇人、いづれも袖を聯ね形を正して門に立ち、月を仰いで拝してゐる」ところを目撃する。これを見た綺堂は以下のように述べる。

（略）其の光の奥に神在すとばかりに清く尊く鮮やかに照せる月の前に、未開の彼等が且仰ぎ且拝するのは誠に無理ならぬ事かも知れぬ。又その理屈は姑く措き、皓々明月の下に立つて其の光輝を仰ぎ拝する一刹那、彼等の胸には寸毫の邪念を宿さぬであらう。と思へば、支那人其物に就ては平素尠からざる不快の感を懷いてゐる私等も、この一瞬時一刹那に於る彼等の姿を見て、今宵ばかりは不思議に優しく可愛らしく感じた。彼等は拝すること約二三分にして去る。

ここでは「未開」「支那人其物に就ては平素尠からざる不快の感を懷いてゐる」という現地の人々に対する綺堂の輕蔑の視線があきらかである。と同時に、「失望」した地で出会った月の美しさ、また、そこに生きる「彼等の胸」中を察するにいたる。

こうした発見は綺堂の雇った苦力に対してもあった。「苦力と支那兵」（『文藝春秋』昭和七年八月・昭和八年一月。『猫やなぎ』所収）のなかで、綺堂は苦力の王福と高秀庭のことを回想している。王福とその兄に対しタバコを与えていると、何度目かに断られた。その理由は軍の管理部の方が甚に困っているのです、そちらにあげてほしいという旨だった。綺堂はこれを聞き、「苦力の口から斯ういふ言葉を聞かうとは思はなかつたのである。これまで兎角に彼等を侮つてゐたことを、私は心ひそかに恥ぢた」という。また、風邪を引いた綺堂のために雨夜に一里の道を

往復して毛布を届けてくれた高秀庭に対しては、次のように「自責の念」を感じたことを述べる。

私は感謝を通り越して、なんだか悲しいやうな気持ちになった。前にもいふ通り、私たちは兎角に苦力等を侮蔑する心持がある。その誤りを曩に王福の兄弟に教へられ、今は又、高秀庭に教へられた。いたづらに皮相を觀て其人を侮蔑する——自分はそんな卑しい、浅はかな心の所有者であるかと思ふと、私は涙ぐましくなつた。その涙は感激の涙ではなく、一種の自責の涙であつた。

むろん、隨筆は回想であるので多少大仰に書いている部分もあるが、時が経つても印象深く思い起こされる経験だつたということもできよう。いずれにせよ、綺堂に「自責」を抱かせる体験があつたのである。

「窯変」の従軍記者たちの心情は娘のいたましきや老人の忠心をみて悲しい気持ちへと変化する。「雪女」では現地の「迷信」を馬鹿にしていた堀部が実際に怪異を目撃し、その謎を解き明かせずにいる。そこで行われているのは、自らの優位性の否定である。両作では語り手である日本人は、現地人に対する同情心を得ていくが、こうした人物の姿は、現地の人々に悲しみを覚え、「侮蔑」の対象から外れるという経験をした綺堂だからこそ書き得ることができたといえよう。

おわりに

綺堂は遼陽、沙河と会戦を目撃し、戦闘の惨状や恐怖を体験した。しかし、綺堂が小説に描いたのは戦争の様子そのものではなく、戦地で見聞した土地や風物、そこで暮らす人々の様子であつた。物語の舞台や設定を構築し、

怪談を補強するためにそれらは配置されているが、単に背景を描くだけではなく、満州の人々の姿、また、それを見て同情心を抱く日本人の心情を描くことによって、綺堂自身が得た心情の変化がそこに投影されていると考えられる。

綺堂は現地でしか体験し得ない見聞や苦力との交流を通して自らの「侮蔑」の意識に気がつき、それが「誤り」であることを自覚させられた。それが「窯変」においては従軍記者一行が抱く「悼ましい」気持ちとなり、「雪女」においては「惻いかなやうでも矢はり支那人である」と侮蔑していた「支那人」たちの「迷信」が事実となつてあらわれ、文明人だと思ひ込んでゐる日本人の考えが否定されることによってその逆転が描かれている。

綺堂作品と日露戦争を描いた他作品との相違がここに存在している。軍医として第二軍に配属された鷗外は詩歌に現地の自然描写を盛り込んでいる。たとえば「遼陽を発す」として詠まれたのが次の一首である。⁽¹³⁾

逆へ撃つ みいくさ今し 太子河の 霜のふな橋 どよもしわたる

ここでは「太子河の 霜のふな橋」という満州の自然の厳しさが表現されている。しかし、歌の主題は「みいくさ」にあり、自然を踏み越え「どよもしわたる」ことでその戦いの莊嚴さを拡大させている。一軍人としての矜持があらわれており、こういった戦に臨む心意気は『うた日記』の随所にみることができ、一方で現地の人々への視線は『うた日記』のなかには、ほぼあらわれていない。

同軍に従軍した花袋は「一兵卒」において脚氣を患つてさまよう兵を主人公にし、「叫喚、悲鳴、絶望、渠は室の中をのたうち廻つた」と孤独に死んでいく兵の苦しみへと焦点をしぼりながら、「軍隊生活の束縛ほど残酷な者

はないと突然思つた」と暗に戦争批判をほのめかすような描写をした。^(二四) 国内を舞台とした「田舎教師」では、死にいく清三が「屍となつて野に横はる苦痛、その身になつたら、名誉でも何でもないだらう。父母が恋しいだらう。祖国が恋しいだらう。故郷が恋しいだらう」と「満州のさびしい平野に横つた同胞」へと想像をめぐらせる。花袋の「一兵卒」「田舎教師」とともに大きな大戦の中で死にいく名もなき兵士の気持ちに對しての同情心を描いているといえよう。この兵士への同情は綺堂の画作品において見つけることはできない。そして、花袋も兵への同情心は描き得たが、現地の人々への視線を作品内に描くにはいたらなかった。^(二五)

また、「人を屠ふりて餓へたる犬を救え」という「空想」によって、漱石は国内から戦地の壮絶な様子を書き表そうとしたが、花袋同様に現地人の悲愴までは「空想」に至らなかつたといえよう。

綺堂は随筆の中で「この頃は満州の噂がしきりに出るので、私も一種今昔の感に堪えない」(『猫やなぎ』)や、「毎日の新聞を見るたびに、ひと事とは思はれないやうに胸を打たれます」と回想する。この随筆では、満州事変後の日中関係の危うさのなかで、満州での経験が思い起こされているが、日露戦争後の大正年間であっても同じであつただろう。満州をめぐる国際情勢の均衡のなかで、綺堂は自らが経験した感情の変化を読物作品のなかへ注ぎ込んでいったのである。

※本論中の小説本文は、「窯変」は『青蛙堂鬼談―岡本綺堂読物集二』(平成二十四年十月、中央公論新社)、「雪女」は『今古探偵十話』(平成二十六年、六月)からすべて引用した。随筆等については随時本文中に示したとおりである。

※本論中、「支那」等今日では不適切とされる表現が使用されているが、当時の時代背景、作者の意識を考慮し、原文のまま表記した。

〔一〕 本論で扱う読物のほか、日露戦争時の出来事を書いた読物に「火薬庫」（面白倶楽部）大正九年十月初出）がある。中公文庫『探偵夜話—綺堂読物集四』（二〇一三年十月）の「解題」で千葉俊二氏は同作品を「日露戦争を背景として中国の東北部で起こった奇怪な事件を扱ったもの」としているが、本文中にその所在地を明確にあらわす語句もなく、また「町の新聞記者」といった言葉から日本国内を舞台とした作品であるとも考えられるため、本論では扱わないこととした。なお、この「火薬庫」は綺堂の随筆「狐妖」（二階から）『五色筆』大正六年十二月、南人社所収）に書かれている音楽家から聞いた「怪談」をもとにしていてと考えられる。

〔二〕 清水潤「岡本綺堂の怪談」（『論樹』第十三号、平成十一年）

〔三〕 ただし、和井府清十郎氏によるWEBブログ「綺堂事物」に「岡本綺堂の日露戦争従軍」の記事がある。田山花袋や司馬遼太郎の記述をふまえ、綺堂の足跡を追っている。しかし、「東京日日新聞」の「第二軍従軍記」にあたらないうまま、長く更新がとまっている（<http://kidojutsu.web.fc2.com/contents/jyugun.htm>（二〇一一年十一月二〇日最終閲覧））。

〔四〕 東京日日新聞社の正式な記者としては黒田甲子郎が派遣された（昔の従軍記者）。

〔五〕 義和団事件に出兵した列強諸国の多くがカーキ色の軍服を採用しており、日本軍はこれを研究していた。日露戦争においては「下士卒以下の戦時服は、夏冬をつうじてカーキ服とされた」という（大江志乃夫『日露戦争の軍事的研究』昭和五十一年、岩波書店）。綺堂は「猫やなぎ」においてカーキ服をきいていたため、現地人に軍人だと思われたというエピソードを述べている。

〔六〕 「日清戦争同様作戦に関する記事は制限されたため、帰還将兵や後送された負傷兵たちの談話や遺家族への訪問記事が紙面を賑わした。日露戦争においても、戦場美談や武勇伝が「内地の士気民心を興奮せしめ」たのである」と井上祐子氏は指摘する（『日清・日露戦争と写真報道 戦場を駆ける写真師たち』平成二十四年七月、吉川弘文館）。

〔七〕 これについては「遼陽攻撃従軍記（第九信）」のなかに、「予等は従軍記者の七つ道具とも云ふべき雨着、毛布、背囊、雑囊、望

遠鏡、短銃、水筒の類を或は肩にかけ或は首にかけ腰に纏ふて配属師団の司令部に趣き人馬の後に尾きて進發す」との記述もある。

〔八〕小松和彦編『怪異の民俗学⑦ 異人・生贄』（平成十三年、河出書房新社）に収録。

〔九〕同右。

〔十〕ただし、桂井和雄氏は「遍路や六部などの持ち金を盗んだ家筋の話」のなかで、「異人殺し」の語を使用していない。

〔一一〕千葉俊二「解題」（岡本綺堂『今古探偵十話―綺堂読物五』平成二十六年六月）

〔一二〕綺堂はこの「悲劇」に対し、「その責は誰にあるこれ云ふまでも無い事で、彼露軍は実に人道の敵！ 悪魔！ 蝮の裔！」とその責をロシア軍にあるものとし、罵っている。かといって、必ずしも憎しみのみをもっていたわけでもなく、「露軍戦死者の新墳が無数に連なつてゐるのを見たときに、私は暗い心持になつた。敵と友に引分れているもの、彼等もまた祖国の忠心である」（『独吟』）と述べている。

〔一三〕森鷗外『うた日記』（明治四十年九月、春陽堂）

〔一四〕引用は『花袋全集 第一巻』（昭和十一年、花袋全集刊行会）による。

〔一五〕たとえば花袋は『第二軍従征日記』のなかで苦力に対して「動物」という表現を多用している。坪井秀人は花袋の日記について「彼らは『亡国の民』として憐れまれ、不潔視されて蔑まれており、何より苦力の場合は雇われの身としての圧倒的な下位性が前提になっている」と評している（『棄却されしものたち』小森陽一・成田龍一編『日露戦争スタディーズ』平成十六年二月、紀伊國屋書店）。花袋の視線は兵個人の哀れさには向いたが、現地の人々へは向かなかったと考えられる。その点で綺堂との違いが見てとれるだろう。